

## オノマトペの多言語比較～オノマトペをつくろう

ねらい：①音と深く関わるオノマトペの言語ごとの差異や共通性を学ぶ。

②オノマトペを通して世界の言語の多様性に触れる。

③オノマトペをつくることにより、言語の創造の過程を体験する。

④ひとりひとり異なる、多様な表現が生まれる背景を体感的に理解する。

対象：小学校高学年以上

時間：45分～

準備：いろいろな種類の紙（コピー用紙、新聞紙、アルミホイル、紙質の違う広告、あれば和紙など）を用意。

あらかじめ2-3人のグループにわかれておく。

進め方：

### ①導入

資料（3～4頁）を読む／または説明し、オノマトペと外国語のオノマトペについて理解する。

### ②オノマトペづくりに挑戦

実際に音を出し、オノマトペを自分たちで作って、くらべてみる。

1) 1枚の「紙」から、どのようなオノマトペを出せるか考える。

（べらべら、ひらひら、くしゃくしゃ、びりびりなど）

2) グループごとに、実際に、紙を丸めたり、ちぎったりしてみる。そのとき聞こえてきた、実際の音をことばにして、発音してみる。

3) 発音してみた音を、文字にしてみる。

4) 文字にした音と、発音の仕方を、発表しあう。

留意点：一般に言語学習では、「正しい」ことば遣いをするのが求められよう。それ

も言語教育の重要な役割だが、一方で自分で・自分なりの・ことばを編み出すこと、生み出すこともまた、言語の創造性にとって大事なことといえる。

ここではひとつの正解を求めるのではなく、差異を楽しむ時間を目指したい。

また、実際にオノマトペを自分で作ることで、自分たちが作ったオノマトペの多様性と、世界のオノマトペの多様性について、つながりが感じられるとよい。

発展：次の点について考えたり、調べたり、話し合いを行う。

（１）これまでに会ったオノマトペのなかで、珍しいと思ったものには、どんなものがあるだろうか？

（２）インターネットやマンガなどでは、新しいオノマトペが次々と生まれてくる。珍しいオノマトペを探してきて、なんのシーンに使われているのかを友達に考えてもらおう。

（３）学校のなかのあれこれに、オノマトペをつけてみよう。

「教科書」「ノート」「鉄棒」「校長先生」「給食」「放課後」「音楽室」・・・その他、自由にトピックを選んでみよう。

（４）外国語や方言に、オノマトペをつけてみよう。

「英語」「フランス語」「日本語」「関西弁」・・・その他、自由にトピックを選んでみよう。

（５）表１にならい、インタビュー調査やインターネットなどを使い、外国語を使ったオノマトペの表をつくることに挑戦しよう。

<参考>世界動物の鳴き声辞典（動画）

[http://www.gizmodo.jp/2013/07/post\\_12735.html](http://www.gizmodo.jp/2013/07/post_12735.html)

<資料>

●オノマトペとは何か

ワンワン、ニャーニャー、ぱくぱく、ぼろぼろ・・・。

日本語にはオノマトペ（擬音語・擬態語）がたくさんあるといわれている。このような種類のことばは、子ども向けの「わかりやすい」ことばと思う人もいるかもしれないが、日本語を学ぶ外国人にとっては理解のハードルが高いという。また、日本のマンガなどを海外に翻訳するときに、最も大変なのが、このオノマトペの翻訳だという。静けさをあらわす「シーン」はマンガの神様、手塚治虫が最初に使ったといわれている（ただし、反対意見もある）。また「もっきゅもきゅ」は耳慣れないオノマトペかもしれないが、羽海野チカが白玉だんごを食べるシーンに使っている（『3月のライオン』⑧、白泉社、2012）。

誰にでも、新しいオノマトペを造りだす可能性があり、それが人々の感覚に受け入れられれば、市民権を得て、一気に広がる可能性がある、といえる。

●外国語でなんと鳴く？

動物の鳴き声はおなじみのオノマトペだが、同じ動物の鳴き声でも、言語によって表現がかわってくることもよく知られている。

にわたりの鳴き声は、日本語では「コケコッコー」だが、外国語になおすと、次の通り。

コッカドゥードゥルドゥー	英語	ククリク	クロアチア語
ココリコ	フランス語	カカリク	リトアニア語
キケリキ	ドイツ語	コキカエクー	カンボジア語
キッキリキ	イタリア語	ウオウオウオ	中国語
クカレク	ロシア語	オッオオッオー	ベトナム語
キキリヒ	チェコ語		

黒田龍之介『にぎやかな外国語の世界』白水社、2007より

ちなみに、これらはおんどりの鳴き声だ。

なぜ、同じ現象（雨が降ったり、犬が吠えたりする）なのに、表現は違ってくるのだろうか。

●外国語でどう歩く？

次に、歩き方の違いに着目してみよう。次の表は、6カ国語によるさまざまな歩き方の違いを示している。

表1 <歩く>ことのオノマトペ

日本語	英語	フランス語	中国語（発音）	朝鮮語（発音）	スワヒリ語
よちよち	totter / toddle/ waddle		kē kē bàn bàn		batabata
足を広げて 歩き回る					magamaga
のろのろ/ぐ ずぐず	walk slowly / loiter	marcher très lentement/ marcher d'un pas de tortue	màn màn tēng tēng	nurit-nurit	
ぶらぶら	stroll /ramble roam/wander/saun ter/amble/lounge/ loiter/mooch/traips e/ linger	marcher sans but traîner	yóu yóu dàng dàng	əsulrəng- əsulrəng	
つま先でゆ っくり歩く					nyatunyatu

荳阪直行（1999）『感性のこばを研究する—擬音語・擬態語に読む心のありか』（新曜社）を参考に、筆者作成。

言語学者の荳阪は、オノマトペの作り方に、次のような特徴を見いだしている。

- \* 英語では、動詞の細分化によってあらわす。
- \* フランス語では、副詞を補ってあらわす。
- \* アジアの言語には、繰り返しのオノマトペが多い。

また、スワヒリ語では胡椒をpilipili、急ぐ様子をchakachaka、頭痛はkizungzungu、garagaraは何もすることがなくてゴロゴロと過ごすことをいう（荳阪、同上）。これらの音は、日本語の話者からすれば、感覚的に「理解できる」ものではないだろうか。動物の鳴き声など、音のするオノマトペが似ているのはわかりやすいが、音のしない、様子をあらわすオノマトペに、共通の音が使われているのは、感覚的に共通する部分があるということだろうか。